

■ 書 評



日常診療に必要な 認知症候学

池田 学 編著
新興医学出版社
2014年7月 196頁
本体価格 5,000円+税

一昔前は、高齢者ならボケいても仕方ないとか高齢者にみられる認知機能の低下は包括して認知症という一言でくられ、特に治療の対象として注意が払われていなかった。その後高齢化に伴い、認知症患者にみられる言動に対する家族の負担がクローズアップされ、それをおさめるべく精神科医が動員されるようになった。今のように介護施設が充実しておらず、また、認知症に対しての理解も不十分であったため、対応困難であるとの理由だけで、精神科病院への入院を求めて来院する家族が多かった。おそらく認知症そのものを診ているのではなく、今でいう周辺症状に翻弄されていたのである。その後、抗認知症薬が発売され、多くの精神科医が暗闇の中の一筋の光のようにその薬にすがった。認知症を根治できないことは重々承知であるわけだが、精神科医のみならず、神経内科医も認知症の診療に加わり、今や認知症を取り巻く医療に対する関心が高まっている。このように認知症への関心が高まる中、地道に研究を重ねてきた基礎研究の成果も相まって、十把一絡げにされていた認知症には様々な原因があり、鑑別をすることがその後の治療や予後に影響をあたえるということがわかってきている。ただ、バイオマーカー、脳画像の進歩によりその診断の精度は増してきているものの、まだ十分ではない。

その中で、症候学がなぜ重要なのかという問いに、著者は冒頭で答えている。それを要約すると、①症候学は診断だけでなく、治療やケアに欠かすことができない、②特別な検査がなくても、CT、MRIと診察でほとんどの認知症は診断できる、③非薬物療法の実施に際して症候学の知識は不可欠である、④正確な症候

学の知識は、神経心理検査などの開発の一助となる、⑤新たなる臨床分類の発見につながるなど多くのメリットを内包していることである。認知症の症候学で日本の第一人者である故田邊敬貴愛媛大学教授の高弟である池田学氏がこの書の編者である。田邊氏に縁のあるわが国を代表する認知症の専門家である田邊氏の重要性を熟知した著者らが、認知症を抱える患者に対してただ所見を得る情報源としてだけでなく、尊厳ある一人としてかかわっている姿が目に浮かんでくる。書を読み終えた後に温かみの余韻さえ感じる。田邊氏の神髓が脈々と受け継がれているのであろう。

さて、この書の構成としては、第一章の「総論」に続いて、第二章では「認知症をきたす疾患の症候学」として、アルツハイマー病、血管性認知症、レビー小体型認知症、前頭側頭葉変性症、皮質基底核変性症、進行性核上麻痺、正常圧水頭症、慢性硬膜下血腫と主な疾患を網羅している。その中で、正常圧水頭症、慢性硬膜下血腫は、早期発見することで治療可能であるため、認知症専門医のみならず、一般医にも是非とも知っておいてほしい内容である。

そして、第三章は「症候学 各論」となり、13の小項目を設け各症状について詳細に記している。認知症の中核となる症状と周辺症状、そして合併症などが混在している点が少々気になるが、症状からみて診断に結びつける過程にも言及されており、非常に参考になる。末章である第四章では、「症候学から生活支援へ」と題して、いま話題となっている自動車運転の問題を取り上げ、また、症状を通して認知症の人を理解する足がかりを紹介している。

各節は適度な長さであり、わかりやすい言葉で簡潔にまとめられ、時に図表を交えて読者を飽きさせない。また小見出しを多く設けていることで、必要な箇所をすぐに検索しやすい工夫がされている。随所に一寸した診察上のコツなども散りばめられ、日常診療に即役立つような内容がぎっしり詰まっている。認知症を専門にする医師のみならず、認知症の初学者にとっても是非一読する価値のある書である。きっと読み終えた時には、診察室の本棚に常備しておきたい一冊になることと思う。

(忽滑谷和孝)